



取り出したバナナ繊維はロープに掛けて乾燥させる。

バナナペーパーの原料づくりには極めてシンプル。まず、一メートルほどにカットした直径二十センチほどのバナナの茎を大きなナイフで真っ二つに。真ん中の芯を取り除いて、繊維質の周りの部分を専用の道具を押し当てながら裂いていく。ちなみにこの道具は、地元の大工に注文してつくった特注品。敢えて地元の人材に発注することで、地域経済に貢献しようというのだ。

こうして細くして少しごわごわした繊維がとれたら、あとは水分をしっかり絞って、天日で乾燥させるだけ。このバナナの繊維が日本へと輸出され、パルプとなつてバナナペーパーに加工されている。

バナナペーパーのつくり方

紙と混ぜてバナナペーパーをつくるプロジェクトを手がけるOne Planet Cafeの取締役、ペオ・エクベリさんはこう語る。「エンフエは世界でもっとも生物多様性が豊かな地域の一つです。サステナブル（持続可能）なビジネスをつくることで、開発からこの宝物のような場所を守りたいと考え、そのためのアイデアを探しているときにバナナペーパーと出会い、これだとひらめきました。だって、バナナペーパーって言葉を聞くだけで、美味しそうだし、なんだか楽しそうでしょ！」



バナナが育つエンフエの大規模農園。

✈ 海外の現場から 6

ザンビア発 バナナから生まれる エコでハッピーな 紙づくりの現場へ！

アフリカのバナナからつくられた紙が日本で使われ始めているのをご存知だろうか。かすかにバナナの繊維が残る独特の風合いをもつその紙。いったいどんな場所で、どんな人たちによってつくられているのだろうか。アフリカという未知の大陸への想いを膨らませながら、バナナペーパーのふるさとであるザンビアへと飛び立った。

企画／オールライト工房
文／沼上純也
写真／服部貴康

東京から飛行機とサファリカーを乗り継いで丸一日。十五分も車を走らせれば、野生のゾウやキリンやインパラが目の前を横切る、息をのむようなワイルド・ライフが身の回りに広がるザンビアはエンフエ村。民族衣装のチテンゲを身にまとった女性たちがカラフルなタライを頭の上に乗せて水を運ぶ姿がいまも日常的に見られるこの村には、陽気で笑顔の美しい人々が暮らしている。

バナナ繊維が紙に?!

この村で栽培される農作物の一つが、オーガニックバナナ。収穫を終えたバナナの木は、根本から切り倒され、茎や葉は捨てられる。しかし、その茎に資源としての可能性が眠っていた。バナナの茎からとった繊維をフェアトレードで輸入し、日本で古



1 村のまわりは野生動物たちの王国。2 村の民家は土壁に茅葺き屋根が特徴。3 バナナの茎をナイフで真っ二つに。4 カットした茎の断面。5 左官用のコテに似た特注の道具(木製)で茎を割いて繊維を取り出す。6 取り出した繊維は手で絞って水気をきる。

*この記事の使用書体=太ゴBI01/太ミンA101/中ゴシックBBB/こぶりなゴシック



楽しそうに活版印刷ワークショップに参加する現地スタッフの女性。



One Planet Caféの女性スタッフたちとオールライトの三人。

「素敵！とっても幸せ！」こぼれんばかりの笑顔で歓声を上げたのは、エンフエ村でバナナ繊維の加工に携わるOne Planet Caféのスタッフたち。今年四月、活版六尺の連載でもおなじみオールライト工房一行がザンビアを訪れた際に、原料をつくらせている現地のスタッフたちに対して行なった活版印刷のワークショップで的一幕だ。

今回行なったワークショップは、バナナペーパーに活版で名前を押しつけて自分たちの名刺をつくるといふもの。自分の名刺を持つのも初めてという彼らだが、実はスタンプやシールという文化もないらしく、手で書く以外の方法で自分の名前を表記できることにも驚いたという。欠けや擦れの出やすい手押しでの印刷ということもあり、力の入れ具合に苦戦しながらも、初めての活版印刷体験に夢中になっている彼らの姿は微笑ましかった。

掠れや欠けなどのいわゆる失敗作も彼らにとっては宝物のような存在だ。苦勞して加工したバナナ繊維からできた紙に、自らの手で印刷した世界に一つだけの名刺は、思い入れもまた格別。さっそく自慢げに配りまくる人。愛おしそうに眺める人。隣同士で見せ合って楽しそうに笑いあう人。表現こそさまざまだが、彼らのその表情は一樣に自分たちの仕事がこうして製品へと結びついたことへの誇りと喜びで満たされていた。

本コラム バナナチームが活版印刷に挑戦

「あの繊維がこんな風に（紙に）なるなんて信じられない！」現地スタッフの一人は、すっかり姿を買って日本から里帰りしたバナナペーパーを手にして、嬉しそうにこう叫んだ。また、別のスタッフはこう語る。「この仕事をできて本当に嬉しい。安定した給料をもらえるおかげで、子どもたちを学校に行かせることもできるのよ。」

One Planet Caféは、日本人とスウェーデン人、そしてザンビア人の取締役三人によって立ち上げられ、工房では現地の無職の人たちを採用している。その活動は、同情にもとづく単発のチャリティではなく、質の高いものを継続的につくり、途上国の人々が自立できるビジネスを築こうというサステナビリティの考え方で貫かれている。バナナペーパーの売上の一部は、現地スタッフの教育にも役立てられる。現在十三名いるスタッフのうち、十名は経済的な理由から小学校すら出ていない。そんな彼らが、みずから失業中の教師を雇って英語と数学を（とても楽しそうに）学んでいるのだ。

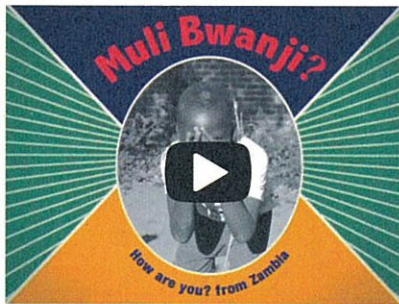
あの黄色くてかわいらしいバナナからつくられたからと侮るなかれ。ザンビア生まれのこのバナナペーパーは、途上国の自立と豊かな自然環境の保全をしつかりと支えるビジョンが詰まった「夢の紙」なのだ。

バナナが育む地域の自立

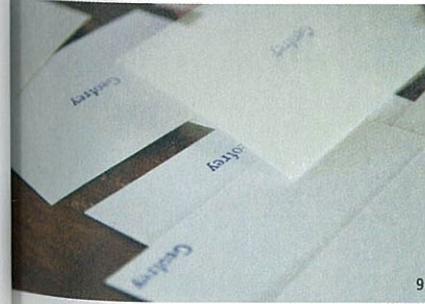
株式会社 One Planet Café
持続可能な世界の実現にむけて、先進国と途上国のパートナーシップによって、環境と人を大切にするビジネスに取り組んでいる。その一環として、2011年よりザンビアからフェアトレードで輸入した繊維を使ったバナナペーパーの製造・販売を手がけている。パルプの製造もアフリカで行なうことやバナナ繊維100%の紙の製造を目指して、現在もプロジェクトは前進を続けている。バナナペーパーの注文、同社が手がけるザンビアへのエコツアーの問い合わせは、下記ウェブサイトから。
<http://www.oneplanetcafe.com/>



One Planet Caféの取締役のみなさん



この活版印刷ワークショップも含めたエンフエ村での滞在をまとめたショートムービーをYoutubeで公開中。Youtube (www.youtube.com)にて、「Multi Bwanji?」で検索。



7 英語の授業を受ける現地スタッフたち。
8 完成した自分の名刺と一緒に記念撮影。
9 名前を印刷したバナナペーパーの名刺。